

日本語母語話者と日本語学習者の 意見を述べる文章の比較研究

——中国語母語日本語学習者を対象として——

荻田 朋子*

A Comparative Study in Discourse Structure in Opinion Writing by Japanese
Learners and Native Speakers : Focused on Chinese L2 Learners of Japanese

Tomoko OGITA

要旨：本稿では、日本の大学学部在籍する日本語母語話者（JP）と中国語日本語学習者（CN）によって書かれた2つの課題についての意見を述べる文章を対象に、文章構造型および表現形式の違い（主題文における叙述表現・意見の質、文脈展開、文構造）について比較・分析を行い、両者の日本語意見文の特徴を明らかにした。その結果、次のような特徴が明らかになった。文章の書き出しは課題文の影響を強く受けること、文章のはじめで漠然としている主張は文章のおわりで具体化されること、文章構造で見られた文脈展開が文構造においても見られることである。また、日本語母語話者の文章は主張が多いこと、逆接的文脈展開で意見が表出されること、課題別に表現形式（主題文における叙述表現・文構造）に使い分けがあることが明らかとなった。一方、日本語学習者の文章は主張が少ないこと、順接的文脈展開で書かれていること、課題別に表現形式の使い分けが見られないことなどが明らかになった。

Abstract :

This paper clarifies the characteristics of opinion essays written in Japanese by native Japanese speakers (JP) and Chinese learners of Japanese (CN) enrolled in a Japanese university by comparing and analyzing the differences in sentence structure types and expression forms (narrative expression and opinion quality in thesis statements, context development, and sentence structure) between Japanese opinion essays on two issues. As a result, the following features were found : the beginning of the writing is strongly influenced by the task, the vague assertions at the beginning of the writing are concretized at the end, and the context development seen in the essay's structure is also seen in the sentence structure. In addition, it became clear that the sentences of native speakers of Japanese contain many assertions, and that they express opinions in an adversative context and that they use different forms of expression (narrative expression and sentence structure in thesis statements) for different tasks. On the other hand, the sentences written by learners of Japanese have fewer assertions, are written in a resultative context, and do not use different forms of expression for different tasks.

キーワード：文章構造、文脈展開、文構造、叙述表現、文の機能

*関西学院大学国際学部常勤講師

1. はじめに

意見を述べる力はレポートや論文執筆のためになくてはならない基礎的な能力である。また、意見を相手（読み手）に伝えることは、コミュニケーションの一つである。日本留学試験の記述問題を契機に、日本語意見文について議論される機会は増えた。しかし、意見文の研究は接続詞や節といった言語形式の一部を対象にしたものが多く、文章構造との関連性についての議論は十分ではない。時枝（1977, p.2）が「文章には、文とは異なった別個の統一原理というべきものが存在するように考えられる」と述べているように、文章の中で文脈を得ると文単独ではなしえなかった意味が新たに生まれる。文脈とは文章の意味内容のつながりのことである。したがって、文章内容、表現意図、言語形式を関連させた文章構造の分析が必要である。また、文章構造は書き手の文化的背景と密接な関係があり、言語の違いによって文章構造に違いが見られことが報告されている（Kaplan : 1966）。日本語意見文の読み手は日本人であることが多く、日本語学習者の意見文が読み手の背景知識と異なれば、読みにくい、分かりにくいといったコミュニケーション上の摩擦が懸念されるのである。以上のことから、本稿では日本語母語話者（以下、JP）と中国語母語日本語学習者（以下、CN）の意見文について両者の違いを文章構造型および表現形式の違い（主題文における叙述表現・意見の質、文脈展開、文構造）の点から明らかにする。また、意見文の文章構造には課題文が影響を与えることが、佐々木（2001）、杉田（1994）において示唆されていることを鑑み、課題文を2種設定し、文章構造に与える影響についても考察する。

2. 調査概要と分析方法

調査は日本の大学学部在籍する母語話者（JP）40名と中国語日本語学習者（CN）（日本語

能力試験 N2 以上）40名¹⁾の計80例の600字程度の意見文（時間制限なし、辞書の使用可）を対象とした。また、課題1「“将来のために貯金すること”にあなたは賛成ですか、反対ですか」（賛否を問う形式）課題2「IT化（情報化）の進歩が私達に与える影響について」（テーマだけが与えられる形式）設定し²⁾、課題文だけを提示した。文章構造型への分類に際しては、木戸（1992）の「文の機能」を再考した上で設定した計8つの「文の機能（「主張①」「主張②」「評価」「理由」「根拠」「解説」「報告」「提示）」をもとに、木戸（1992）と同様に、機械的に文単位で3段落に分割し「主張」が現れる場所で文章構造型に分類した。「文の機能」の詳細については荻田（2021）を参考にされたい。「主張①（賛否の立場表明の文）」、「主張②（提案・要望・願望・警告などの具体的な意見を表す文）」を区別し、2つの「主張」が含まれる場合は、主題文は統括力（佐久間：1999）の高い「主張②」の文であるとした。

3. 課題別による文章構造の比較

本節では、課題文が文章構造型に与える影響について述べたい。[表1]は課題1、[表2]は課題2の結果である。a型は主張①のみ、b型は主張②のみ、c型は主張①と主張②の両方が現れる文章である。ここで統括力を考慮すると課題1のc型両括型のうち、文章のはじめに主張①の文のみが現れるのはJPで7例中5例、CNで10例中7例であり、これらの文章はおわりにより統括力の高い主張②が現れる。ゆえに、尾括型に含まれることになる。[表1]の結果を見ると、JP、CNともに両括型と尾括型が多い。これらの文章構造は書き手の主張がおわりに現れるという点で共通している。また、JPは分括型が最も多くなった。それには2つの要因が考えられる。まず、課題1の提出方法が疑問形であるため、必然的に賛否の立場を表明する主張①で書き

1) 課題1、2で重複しているCN被験者が8名いる。

2) 日本留学試験の過去の記述問題および、『平成16年度 外国人留学生大学入試問題集（第一分冊日本語・小論文編）、専門教育出版』に掲載されている各大学の小論文の課題を参考に設定した。

表1 課題1の文章構造類型（※b型両括型…1例含む）

【JP】					【CN】				
構造型	a型	c型	合計	%	構造型	a型	c型	合計	%
両括型	3	2	5	25	両括型	6	3	10※	45
尾括型	—	5	5	25	尾括型	—	7	7	35
頭括型	1	—	1	5	頭括型	1	—	1	5
中括型	—	—	—	—	中括型	—	—	—	—
分括型	2	7 ³⁾	9	45	分括型	—	2 ³⁾	2	10
潜括型	—	—	—	—	潜括型	—	—	—	—
総数	6	14	20	100	総数	7	13※	20	100

始められ、それはより発展的な意見主張②を誘導しやすいと考えられる。次に、課題1の「貯金すること」というテーマは、個人的な価値観によるものなので、意見を明示的に示すことに抵抗感がないと推測される。

一方、課題2では主張①は現れず、すべての文章がb型であった。JPの35%が尾括型と分括型で、CNの40%が尾括型、50%が潜括型の文章であった。つまり、両括型の文章がなくなり、尾括型と潜括型の文章が増えた。特徴的な点は課題2では文章中に主張が現れにくく（潜括型）なったことだ。それには2つの要因が考えられる。まず、課題2の「IT化が与える影響」は、課題1のように個人的な価値判断で論じることができないため明示的な主張を避けることでテーマの社会性を維持しようとしているとも考えられる。次に、テーマだけしか提示されない場合、意見の表

出まで話題の焦点を絞りきれないためである。そのため、課題の提示方法と話題性の問題を棲み分けて再調査する必要がある。

次に、質的な側面から課題2の結果の分析を進めることにする。潜括型は主張が背後に潜在するものである。課題1では主張①が文章のはじめに、主張②が文章のおわりに現れやすいことを述べた。そこで、課題2でも潜括型のはじめとおわりを観察する。まず、「IT化」を提題表現として持つ文で書き始められる特徴が観察された。この特徴はJP、CNの両者で見られた。

1. 私達が生きている現代においてITは重要な役割を果たしてきた。(JP06②)
2. IT化が私達に与える影響は計り知れないものがある。(JP15②)
3. IT化が進む今日、私たちの暮らしには多くの影響を与えられている。(JP09②)

表2 課題2の文章構造類型

【JP】				【CN】			
構造型	b型	合計 (b)	%	構造型	b型	合計 (b)	%
両括型	—	—	—	両括型	1	1	5
尾括型	7	7	35	尾括型	8	8	40
頭括型	—	—	—	頭括型	—	—	—
中括型	1	1	5	中括型	—	—	—
分括型	7	7	35	分括型	1	1	5
潜括型	5	5	25	潜括型	10	10	50
総数	20	20	100	総数	20	20	100

3) 同様に、c型分括型においても統括力を考慮すると、9例中2例が頭括型、1例が中括型に含まれる可能性を除き、6例は「主張②」が分散していた。

4. IT化の進歩は、私達の生活にも多大な影響を与えている。(JP04②)
- ※ () 内数字は資料番号を表す。①は課題1、②は課題2の文章を表す。
- ※ は提題表現、 は提題表現を示す言語形式上の指標、 は叙述表現で意見を表す部分を示す。以下、同様。

しかし、書き手の主題に対する見解を一般化して述べているが意見ではないので、主張①の代わりの機能を果たしているとは言い難い。このような文の後には、IT化が与えた影響はどのようなものかを説明する文が続くという点で、段落の話題を示す提示の機能に類似している。実際に以下のような提示の文で始まる例も見られた。

5. IT化が私達に与える影響は二種類あると考えられる。(JP17②)
6. 情報が私達に与える影響は、良い部分、悪い部分の両面性を持っている。(JP13②)
7. IT化の功罪について述べる。(JP02②)

次に、文章のおわりでも主題である「IT化」を提題表現に持つ文が現れる特徴が観察された。そして、文章のはじめよりも具体的な見解へと移行している。

8. IT化は便利さばかりに目がいくが実態のない物を相手にするいわばパンドラの箱であるのだ。(JP15②)
9. IT化が私たちに与える影響は、計りしれないものである、と同時に、私たちがITに依存している関係というのも、計りしれないものだったりするのである。(JP03②)
10. ITは使い方一つでその利便性・危険性を発揮する。(JP02②)
11. IT化が進むと私達への影響とは(は)、便利でもあるが危険なものでもあるということで、最新の注意を払いながら生活していくということであると思います。(JP14②)
12. いずれにせよモラルの上での行動で(IT化が与える)影響が決まる。(JP13②)

つまり、潜括型の文章は主題に対する一般的な見解の文で始まり、最後にもう一度主題に立ち返り、見解を具体化することで意見文としての論をまとめるという文章展開が見られるのである。よ

って、潜括型の文章であっても、書き手の主張は文章のおわりに現れやすいと言える。ただ、CNの潜括型の文章ではおわりに主題に対する見解が具体化されることはなかった。このことは次節で詳しく考察する。以上、課題の違いに関わらず、日本語意見文の書き出しは、課題文の影響を強く受けること、JPの意見文ではおわりにかけて主張が具体化されることが分かった。永野(1986, p.158)は「最初の書き出しをどうするかで、文章の叙述の流し方が決まるし、それは文章の内容や構想と密接な関係がある」と述べているが、今回の調査でそのことが認められた。

4. JPとCNの文章構造の比較

4-1. 叙述表現と意見の質の比較

本節では、JPとCNの違いについて議論したい。[表1]を見ると、JPは両括型よりも分括型の割合が高い。一方、CNは両括型の割合が高く、分括型は2例しかない。つまり、JPは文章の途中で主張を繰り返す点でCNとの文章展開に違いが見られる。[表2]でも、JPは尾括型、分括型が35%ずつ、CNは潜括型の文章が50%を占めている。つまり、JPは主張が多く、CNは主張が少ないことを示している。[表3]は主張②に現れた叙述表現の出現度数(文の数)・割合・独立性の検定(カイ二乗検定)の結果を示している。主張②は賛否から発展して提案・要望・願望・警告などのより具体的な意見を表すため、主張①よりも叙述の表現形式を自由に選択することができる。

この結果を踏まえ、一人が同じ叙述表現を多用している可能性も鑑みて()に用例数を併記しながら、質的に分析していきたい。課題1でCNが多く用いている④「～ほうがいい」は、すべてが「貯金したほうがいい」(5例)という表現であり、主題に対する賛成の立場表明とも考えられる。そのため、その他の叙述表現に比べると意見の程度が低く、質的な側面からもCNの意見文には主張が少ないと言える。また、課題2では②「～だ」(断定)を多く用いている(4例)ことから、池尾(1974, p.4)がCNは「話し手の立場の主張、判断の強調、情緒的な述べ方などが特に

表3 主張②に現れた叙述表現

+ : 有意に多い, - : 有意に少ない, p<0.05

	課題1					課題2					独立性の 検定	
	JP		CN			JP		CN				
	度数	%	度数	%	+	度数	%	度数	%			
①～か／～（だろう）か ／～ない（だろう）か	3	8.3%	4	16.7%		10	29.4%	+	3	15.8%	p<0.001	
②～だ（～です）	7	19.4%	2	8.3%		6	17.6%		6	31.6%		
③～たい	12	33.3%	+	1	4.2%		2	5.9%		0		0.0%
④～ほうがいい	4	11.1%		8	33.3%	+	0	0.0%	-	2		10.5%
⑤～ない／～ではない／ ～なければならない ⁴⁾	0	0.0%	-	1	4.2%		11	32.4%	+	2		10.5%
その他 ⁵⁾	10	27.8%		8	33.3%		5	14.7%		6		31.6%
総数	36	100.0%		24	100.0%		34	100.0%		19	100.0%	

むずかしく、そのため不得手な表現形式は避けて使わずに済ませがちである」という問題があることを指摘していることと同様の要因が推測される。一方、JPは課題1では③「～たい」（願望）（8例）を、課題2では①「～ない（だろう）か」（8例）、⑤「～なければならない」（7例）（警告・勧告・客観的必要性）を多く用いるといった主題による叙述表現の使い分けが見られる。特に、①の疑問の形式は、伊集院・高橋（2010、p.18）が、JPはCNに比して書き手の自問自答

的な内的思考を表す「疑問のモダリティ（疑い）」を多用すると指摘しているのと同様に、本調査でもJPは「～のだろうか／～のではないか」（9文／10文）が（疑い）の用法で使用している。このことは、課題2では課題文が漠然としているため、意見表出まで話題を絞り込もうというJPの思考過程が現れているとも考えられる。もう少し、意見の質という点から両者の潜括型文章の違いについて見ていきたい。[表4]は、CNの潜括型の文章の中で、はじめとおわりに主題「IT化」

表4 CNの潜括型文章の考察

	はじめ	おわり
CN01 ②	IT化を <u>進歩</u> している現代社会の中で、人々の生活レベルもついて進歩している。	だから、 <u>IT化</u> の進歩が私たちの生活や仕事などに大きな影響を与えている。
CN04 ②	<u>IT化</u> （情報化）はわれわれの時代で非常に進んでいる。	以上のことはすべてIT（情報化）の進歩が私たちに与える影響である。
CN07 ②	情報化の <u>進歩</u> が私達に大きな影響を与えた。	（情報化の影響は）つまりよいことがあれば悪いことがある。
CN14 ②	もちろん、これらの新しいものは私たちの生活に <u>い</u> ろんな影響を与えた。	とにかく <u>IT化</u> はいろいろなメリットがある。
CN15 ②	情報化は私に対し影響が少ない。	<u>IT</u> が <u>進歩</u> したが、私は後退した。

4) 益岡（2000）に従い、否定辞「ナイ」（益岡では「みとめ方」と述べられている）は命題の真偽を表すものだとし、意見を表す叙述表現には含めないものとした。しかし、モダリティー表現に付加された場合モダリティー性は失われにくく、本稿では否定辞「ナイ」を含む複合辞（例：べきではない）、意見を表す叙述表現の否定形（例：思わない）、判断文の否定形（例：AはBではない）については意見を表す叙述表現としている。

5) 「その他」には、「～べきだ」「～ばいい／～たらいい」「～思う」「～（よ）う」等が含まれる。

が現れる例である。JP は文章「はじめ」から「おわり」に向かって主題に対する見解が具体化されるのに対し（前節参照）、CN の文章ではそのことが見られない。

つまり、同じ潜括型の文章であっても、文章おわりで主題に対する具体的な見解が提示される JP のほうが主張がはっきりと述べられていることがわかる。

4-2. 課題 2 における文脈展開の比較

本節では、紙幅の関係上、課題 2 における JP と CN の文脈展開の違いに絞って比較したい。課題 2 では、JP の 16 例が、CN の 15 例が「IT 化」の是非を取り上げている。しかし、JP の文章では良い影響と悪い影響を「しかし」「一方」「その反面」などの逆接の接続表現を用い、入れ替えながら論を展開していくのに対し、CN の文章では良い影響と悪い影響を対比的に書くという違いが見られた。このことは、両課題で JP に分括型が多いという結果と関連している。文章中に「だが」「しかし」という逆接接続表現から始まる文の数を累計したところ、JP は 30 文（全文数の 1.5%）、CN は 19 文（全文数の 0.9%）と約 2 倍の差があることがわかった。逆接表現には二つの役割があるように思われる。一つ目は良い例と悪い例を対比させる役割である。二つ目は、意見を表出する時のマーカの役割である。どちらも文脈の流れを変えるものであり、文脈展開の違いは文章構造型にも影響を与えるものである。そこで、文脈を意図的に切り替える機能を持つ文を「スイッチ文」と名付け、文脈展開の違いを考察したい。「スイッチ文」は「だが」「しかし」「一方」「反対に」などの逆接表現を指標として含むことが多いが、逆接表現を含む文であっても、同じ意味段落に属する場合はスイッチ文とはならない。意図的な文脈展開が確認できることが重要である。例 1 の 06. 「次に悪い影響では」の文のように、「良い影響では」から「悪い影響では」という提題表現の変化によって認められる場合もあれば、10. 「しかしその便利さや快適さを…」の文のように、隣接する複数の文から認められる場合がある。09. は「悪い影響」の例として挙げら

れている携帯電話の良い面を述べる文だが、提題表現を引き継いでおり、単独では文脈を展開させようとする表現意図が確認できず、「スイッチ文」とはならないが 10. は「しかし」という逆接表現によって意図的に文脈を逆転させようとしていることがわかるので「スイッチ文」となる。言い換えれば、09. の文の挿入によって、10. の文が「スイッチ文」となったと考えられる。JP の文章では、09. のような譲歩的文（書き手が指摘しようとする内容とは反対の内容の文）が主張の前に挿入されることが多い。例 2 の 03. 「しかし、パソコン・インターネットそして…」の文は「しかし」という逆接表現を含むものの、01. 「IT 化が進む中、我々の生活が大きく変わりつつである」についての説明の文であり、同じ意味段落内にあるため、「スイッチ文」とはならない。07. の文は良い影響から悪い影響に切り替わる「スイッチ文」とあると言える。「スイッチ文」を多く持つ文章は話題が二転三転するので、文章構造がより複雑になると考えられる。JP は 17 例 31 文、CN は 16 例 19 文の「スイッチ文」を含むことがわかった。

例 1：(JP11②) ([] は文の機能を表す)

(導入)	
01. [報]	私たちにとって携帯電話は今では欠かせない物となった。
02. [報]	誰もが街の道端や電車の中など様々なところで携帯電話をさわっている。
03. [評]	携帯電話の進歩はとても速いスピードで進んでおり、私達に様々な良い影響と悪い影響を及ぼしているのは確かである。
(良い影響)	
04. [報]	まず良い影響では何にでも使えるようになり便利さが私達の生活をよりよくした。
05. [報]	子供達の安全が叫ばれる中、居場所を確認できる GPS 携帯がでたり、どこにいても私たちは最新情報を得ることができるようになった。
(悪い影響)	
06. [報]	次に悪い影響では、携帯電話の普及にともなうメールを利用する人も増加した。(スイッチ)
07. [報]	そのため人と会って、面と向かって話をす

- るという機会が減り人間のコミュニケーション力がだんだん落ちてきていると思われている。
08. [報] 実際お互いのコミュニケーションの欠如による多くの事件や事故、問題が引き起こされている。
- (良い影響)
09. [評] 最後に、携帯電話は便利で私たちの生活をより快適に過ごせるようにしたのは事実だ。(譲歩的文)
- (警告)
10. [主②] しかしその便利さや快適さを追求しすぎてしまったために逆に見落としてしまうことが多くあることを知っておかなければならない。(スイッチ)
- (提案)
11. [主②] そのためには、情報化の進歩についていき、即座に対応できるような様々な人がいるいろなところで考えるべきである。

例 2：(CN20②)

- (良い影響)
01. [報] IT 化が進む中、我々の生活が大きく変わりつつである。
02. [報] 情報化するまでに人々が身近なことしか知らず、生活範囲も限られ、生活も人々の付き合いも単純にしていた。
03. [報] しかし、パソコン・インターネットそして携帯電話の普及と同時にネットを通して、自宅だけではなく、いつでもどこでも必要な情報がすぐ手に入ることが出来る。
04. [報] 例えば生活面で言えば、明日の天気予報、ネット上での買い物、出掛けの路線・時刻など、インターネットさえつなげておけば何の支障もなくすぐ調べられる。
05. [報] また、自分から誰かにメッセージを送りたい時も、昔何日もかかる手紙と違って、すぐメールを送ることが出来る。
06. [評] IT 化の進歩のお蔭で現代人がより視野を広げられ、物事を処理する時間も大分短縮され、利便さという面で大変優れたものである。
- (悪い影響)
07. [報] しかし一方では、何物でも情報化になり、我々が必ずしも必要な情報とは限らず、毎日膨大な情報量と接しなければならない。(スイッチ文)
08. [評] それらの情報は、かえって負担になること

- も考えられる。
09. [評] さらに、パソコンに向かってすぐ情報を手に入るため、人々の接触が減少しつつ、現代社会の人間関係が希薄になる一因とも考えられる。
10. [評] さらに、情報を悪用される事件が相次ぐ中、個人情報保護の必要性がだんだん重要視されてきている。
- (提案)
11. [主②] 情報セキュリティ対策が、我々が情報化の利便さに恵まれながら、忘れてはいけない課題であると考えられる。

[表 6] は「スイッチ文」の文の数、割合、独立性の検定 (カイ二乗検定) の結果である。[表 6] の「スイッチ文」の使われ方から CN は良い影響、悪い影響、まとめという順接的文脈展開の特徴が観察された。一方、JP は意見表出時にはその前文に譲歩的文が挿入されるため、意見表出時に「スイッチ文」が多く用いられる (例 3~5) が、CN との有意差は認められなかった。

表 6 スイッチ文の使われ方
有意に多い、- : 有意に少ない, $p < 0.05$

スイッチ文	JP		CN		独立性の検定	
	度数	%	度数	%		
良い影響→ 悪い影響	15	48.4%	-	16	84.2%	p=0.028
悪い影響→ 良い影響	5	16.1%	0	0.0%		
意見表出	11	35.5%	3	15.8%		
総数	31	100.0%	19	100.0%		

例 3：(JP01②)

- (導入)
01. [報] 近年ますます携帯電話が普及し、持っていないの方が少ない世の中になっている。
02. [報] いざという時いつでも携帯電話を手にし、電車の中の光景はというと、多くの人が携帯電話で何かしらの事をしている。
03. [評] 携帯電話の発明によって私たちの生活が便利で効率のよいものになったのは確かである。
04. [主②] しかし、このままでよいのだろうか。(スイッチ文)

(悪い影響)

05. [評] 私たちは、便利さにとらわれ、社会や人の心というものはとても冷たいものになってきていると思う。

06. [報] 携帯の悪いサイトや不法な犯罪が行っている。(行われている)

07. [評] それによって社会の秩序というものも乱れているのである。

(評価)

08. [評] 便利なものに人の心が移っていくのは仕方のないことかもしれない。(譲歩的文)

(主張)

09. [主②] しかし、人々はそれらの見方を明確にし、正しい使用をしていかなければならない。(スイッチ文)

例 4 : (JP13②)

(悪い影響)

01. [報] 情報化が進むということは、情報を悪用され、犯罪に巻き込まれる可能性が増える。

02. [報] 個人情報が保護されているとはいえ、いっどこで情報が漏れているかわからない。

03. [報] 完全に互いの信用とモラルで成り立っているため、犯罪の現場を目撃しにくい。

(評価)

04. [評] IT 化は、便利を好む人間にとってそしてこれからの人間にとってなくてはならないものである。(譲歩的文) (主張)

05. [主②] しかしながら犯罪に対する対策、悪影響を与える部分について改善していくべきだ。(スイッチ文)

例 5 : (JP14①)

01. [主①] 賛成です。

02. [評] 自分でお金を稼いで、自分の為に、使いたい時に使うことは何も悪いことではないと思います。(譲歩的文)

03. [評] 今、という時に重点をおいた場合、それがとても楽しい生き方だと思います。(譲歩的文)

04. [主①] しかし、現実的に考えると、やはり貯金は必要です。(スイッチ文)

譲歩的な文の挿入は読み手意識を感じさせる。そして、主張に説得力を持たせようとする表現意図を感じる。しかし、同時にその主張が論理的に導き出されるものではなく、突発的なものであるような印象を与える。そのため、このような文脈展開は論説文において効果的と言えるかどうかは疑問である。文脈展開と読み手評価や、文章ジャンルとの関連性については今後の課題としたい。

4-3. 文構造の概要

複文は先行研究においても文章の複雑さを表す一つの尺度として用いられ、JP と CN との間で量・質に違いが報告されている(田代：1995、浅井：2002)。「『文章の文脈』は、いわゆる複文にも認められる(市川：1978、p.23)」とあり、本節では複文の量・質の分析に加え、文脈展開にも焦点をあて分析を進める。[表 7] は課題別の文構造の概要(t 検定結果および標準偏差)であ

表 7 課題別の文構造の概要

課題	文構造	JP (20名) 平均 (標準偏差)	CN (20名) 平均 (標準偏差)	p 値 *: p<0.05
1	1 文章あたりの字数	513.15 (40.96)	518.80 (112.20)	0.838
	1 文章あたりの文の数	12.35 (1.59)	14.65 (4.02)	0.029*
	1 文章あたりの節の数	40.00 (4.95)	39.40 (8.42)	0.790
	1 文の長さ (字数)	42.08 (5.21)	37.09 (9.01)	0.043*
	1 文あたりの節数	3.27 (0.45)	2.80 (0.61)	0.011*
2	1 文章あたりの字数	523.75 (68.80)	512.2 (96.49)	0.674
	1 文章あたりの文の数	13.35 (3.55)	13.60 (3.92)	0.838
	1 文章あたりの節の数	34.95 (7.68)	34.05 (7.95)	0.725
	1 文の長さ (字数)	41.84 (12.59)	40.21 (12.53)	0.692
	1 文あたりの節数	2.79 (1.04)	2.62 (0.66)	0.546

る。

3節では課題別に文章構造に違いが見られたが、文構造にも違いが見られた。課題1では、1文章あたりの文の数、1文の長さ、1文あたりの節数に有意差が見られた。課題1では、JPのほうが文が深層化していることが確認できた。また、課題1で有意差ありの項目が、課題2では有意差なしになったことは注目に値する。JPは1文章あたりの平均字数が増えるにも関わらず節数が減って、1文がシンプルになり、両者の差が縮まっている。また、両者とも節数が減っていることから、課題の提示方法・話題性は文構造にも影響を与えていることが示唆される。続いて質的分析に移る。

4.4. 節の質的比較と考察

本稿では先行研究、浅井(2002)や田代(1995)などと同様、益岡・田窪(1992)の節の分類にもとづき、並列節・副詞節・連体節・補足節の5つの統語的役割ごとに節を分類し考察した。[表8]は各節の数、割合、独立性の検定(カイ二乗検定)の結果である。JPは連体節および補足節を多用する傾向が見られる。このことから、課題2の文構造の概要に有意差はなかったが、節の分類によって、課題1と同様にJPの文のほうが深層化していることを指摘できる。

次に、CNは並列節と副詞節を多用する傾向がある。CNは1文あたりに並列節が3つ以上出現する例が12例あるが、JPは1文あたりに並列節が2つ以上出現する例はない。以下はCNの例である。

13. 彼は将来出世するために日本に知識や技術を身につけようとして留学に来ましたが、彼の家庭はそんなに裕福ではなかったせいかもしれませんが、日本で勉強しているうちにいい給料に心が揺れ、最初はバイトしながら学校にもちゃんと行きましたが、続けてあと昼も夜もバイトばかりして、学校には全然行かなくなってしまいました。(CN 12①)
14. 一流の会社で勤め、安定な収入があるとしても突然会社が倒産したり、首になったり、そのせいで家族に心配をかけ、結局自殺したというニュースがよく見られる。(CN 06①)
15. しかし一方で、最近インターネットのアクセスポイントがいつの間にか海外に変わってしまい、後日、高額な国際電話料金を請求されたり、キーボードを押しているうちに、「契約」が成立され、信じがたい数字の書き込まれた請求書が来たり、あるいは商品が届かなかったりといった事例は少なくなりません。(CN 13②)

上例のようにCNが並列節を用いる場合、事実の報告の文を並べることが多い。また、これら

表8 統語的役割ごとの節の分類

+ : 有意に多い、- : 有意に少ない、 $p < 0.05$

課題		並列	副詞	連体	補足	その他	総数	独立性の検定
1	JP	81	159	86	228	246	800	p<0.001
	%	10.1%	19.9%	10.8%	28.5%	30.8%	100.0%	
					+	-		
	CN	99	176	64	160	289	788	
	%	12.6%	22.3%	8.1%	20.3%	36.7%	100.0%	
					-	+		
2	JP	89	93	100	147	270	699	p<0.001
	%	12.7%	13.3%	14.3%	21.0%	38.6%	100.0%	
		-	-	+	+			
	CN	117	121	62	112	269	681	
	%	17.2%	17.8%	9.1%	16.4%	39.5%	100.0%	
		+	+	-	-			

は順接的並列である。順接的並列とは並列節が主節と対立することなく、単純に並ぶ関係にあるものとしている(益岡・田窪 1992、p.206)。これは4-2. で考察したCNの順接的文脈展開と共通している。益岡・田窪(1992、p.206)では、順接的並列には、総記の並列(連用形・テ形)、例示の並列(タリ形)、累加の並列(接続助「し」)があるとしている。本調査では、タリ形はJPで7節、CNで21節、接続助詞「し」はJPで16節、CNで31節であった。この結果からも、CNはJPよりも順接的並列を多用しているとわかる。連用形とテ形については、浅井(2002、p.56)では並列節の中でも学習者はテ形を、母語話者は連用形を用いる傾向があると述べている。また、田代(1995、p.32)では副詞節と並列節のテ形を区別せずに学習者が母語話者に比べ、テ形を用いる頻度が高いことを指摘している。そこで、並列節のテ形・連用形・接続助詞「が」の使用頻度を比較した。接続助詞「が」は逆接的並列の代表的な接続形式とされているが、「先日お電話した高津ですが、花子さんはいらっしゃいますか。」のように順接的並列としても使われることがあり(益岡 1992、p.206)、本稿ではその区別をせず、接続助詞「が」が用いられる並列節の数を累計した。[表9]は各節の数と割合、独立性の検定(カイ二乗検定)の結果である。

課題2では上述の浅井(2002)、田代(1995)と同様に、JPはCNよりも連用形を、CNはJPよりもテ形を多用している。注目すべきは課題1ではなかった有意差が課題2で顕著に現れたことである。連用形並列とテ形並列の違いを文体の面で比較すると、連用形並列の方がより文語的で、後者の方がより口語的である(益岡・田窪 1992、p.208)。このことから、課題の話題性がJPの連用形の使用頻度に影響を与えたと推測される。このことは4-1. で見た叙述表現の使い分けとも関係があるように思われる。

最後に、副詞節の考察を行う。副詞節が表す意味には時、原因・理由、条件・譲歩、付帯状況、様態、逆接、目的、程度、等がある(益岡 1992、p.189)。

は副詞節を表す形式の使用頻度、上位8項目を調べた結果である。

JPもCNも条件を表す副詞節の使用が多いことがわかる。特に、CNは述語のタ系条件形(以下、タラ形)の使用が多い。一方、JPは基本条件形(以下、バ形)と譲歩を表す表現(以下、テモ形)の使用が多い。益岡(1992、pp.192-193)は、条件の表現には法則的なものと偶発的なものがあるとしており、法則的な条件表現とは、与えられた条件下では、ある事態が起ることが、必ず別のある事態が起ることを意味するという因果関係の表現であり、バ形がよく用いられると述べ

表9 順接的並列節接続形の比較

+ : 有意に多い、- : 有意に少ない、 $p < 0.05$

課題		連用形	テ形	接続助詞「が」	その他	総数	独立性の検定
1	JP	18	15	23	25	81	p=0.753
	%	22.2%	18.5%	28.4%	30.9%	100.0%	
	CN	24	17	22	36	99	
	%	24.2%	17.2%	22.2%	36.4%	100.0%	
2	JP	56	5	20	8	89	p<0.001
	%	62.9%	5.6%	22.5%	9.0%	100.0%	
		+	-		-		
	CN	28	31	27	31	117	
	%	23.9%	26.5%	23.1%	26.5%	100.0%	
	-	+		+			

表 10 副詞節を表す形式の使用頻度（上位 8 項目）

JP (全体数 170)				CN (全体数 216)		
1	ば (条件)	39	15.48%	たら (条件)	47	15.82%
2	ても (譲歩)	31	12.30%	ば (条件)	32	10.77%
3	と (条件)	19	7.54%	と (条件)	25	8.42%
4	時	18	7.14%	ので (理由)	25	8.42%
5	ので (理由)	17	6.75%	ても (譲歩)	24	8.08%
6	ため・ために (目的)	16	6.35%	時	23	7.74%
7	たら (条件)	12	4.76%	から (理由)	18	6.06%
8	から (理由)	12	4.76%	ため・ために (目的)	12	4.04%

ている。一方、タラ形は事態の実現に重きを置いた表現であり、2つの事態が偶発的な依存関係であると述べられている。つまり、JP が多く用いるバ形は、CN が多く用いるタラ形よりも論理的な接続であると言える。タラ形のタラ形は条件形以外の初級文型の接続にもよく使用され（～たほうがいい、～たところ等）、バ形と比較すると文法的意味の使用範囲も広く、口語でも使用できる。そのため、CN にとってタラ形条件節がもっとも定着しやすいと考えられる。しかし、本稿では他のト形、バ形の使用も使用頻度の上位に含まれるため、CN がタラ形以外の条件節を習得できていないという問題は考えにくい。タラ形は前件の事態の成立が後件成立のための前提条件となる。そのため前件と後件は順接的なつながりであり、このことは 4-2. で考察した CN の順接的文脈展開の特徴と関連している。つまり、CN がタラ形を多用した背景には文章全体の文脈展開が影響していると考えられるのである。一方、JP はバ形とテモ形の使用が高い。考えられる理由として JP はタラ形よりもバ形のほうがより文語的・論理的であるという特徴を適切に認識しているということが考えられる。そして、テモ形は譲歩を表す条件表現であり、他の条件表現とは異なり前件と後件の関係は逆接的な関係で結ばれる (16.17.) ため、4-2. で考察した JP は譲歩的な文から逆接の接続表現を用い意見を表出するという逆接的文脈展開を好むことと関連していると考えられる。逆接的文脈展開は読み手とのコミュニケーションの観点から考えると、主張が強調されるため、意見の質を高めることができると考えられる。

る。

16. 今、年金を払ったとしても、老後にかけてきた分だけのお金をもらえる保証ははっきり言ってない。(JP05①)

17. たとえ本人がいなくなっても、その家族や親族のためにお金を役立てれば、決して無駄にはならないと思います。(JP02①)

以上、課題文の話題性は文章構造だけではなく文構造にも影響を与えることが示唆された。また、JP の文は広義の連体修飾節によって深層化しているのに対し、CN の文は並列節、副詞節によって横並びに接続されているという違いが明らかとなった。最後に、CN は順接的文脈展開を用い、JP は逆接的文脈展開を用いるという文章の文脈展開の特徴が、文構造においても認められた。

5. おわりに

本稿では JP と CN によって書かれた 2 つの課題の意見文を対象に、文章構造型および表現形式の違い（主題文における叙述表現・意見の質、文脈展開、文構造）について比較・分析を行った。結果、1) 日本語意見文では課題文の影響は文章の書き出しに最も反映されやすく、文章構造にも影響を与えることがわかった。賛否を問う形式の課題 1 では主張が多くなり明示的に出現したのに対し、テーマだけが与えられる課題 2 では主張が潜在化することがわかった。ただし、話題性の影響も否定できないため再調査が必要である。2)

日本語意見文では主張は文章のおわりに出現することが明らかになった。課題1では統括度の高い「主張②」が文章のおわりに出現し、課題2では書き出しの時点で漠然としている主張が文章のおわりで具体化された。そして、両課題でJPのほうがCNよりも主張が明示的であることがわかった3) 文脈展開において文章構造と文構造の平行な関係が明らかになった。JPは逆接的、CNは順接的な文脈展開を好むという特徴があった。4) 課題の話題性は文章構造のみならず、叙述表現や並列節・副詞節の使い分けなど文構造にも影響を与えることが示唆された。5) JPの文はCNより深層的であった。しかし、課題の提示方法・話題性の影響を完全に棲み分けられておらず、CNの意見文の特徴も日本語の未熟さか、文化的背景の影響が明らかにできなかった。また、文脈展開と評価の関係性についても調査が必要である。今回の調査で得られた示唆をもとに調査を続けていきたいと思う。

引用文献一覧

- 浅井美恵子 (2002) 「日本語作文における文の構造の分析－日本語母語話者と中国語母語話者の上級日本語学習者の作文比較－」『日本語教育』(115) pp.51-60
- 浅井美恵子 (2003) 「論說的文章における接続詞について－日本母語話者と上級日本語学習者の作文比較－」『言語と文化』(4) pp.87-97 名古屋大学院
- 池尾スミ (1974) 『教師用日本語教育ハンドブック①文

- 章表現』国際交流基金
- 伊集院郁子・高橋圭子 (2010) 『日本語の意見文に用いられる文末のモダリティ－日本・中国・韓国語母語話者の比較－』東京外国語大学 留学生日本語教育センター論集 (36) pp.13-27
- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 荻田朋子 (2021) 「『文の機能』における諸問題の検討－意見文の文章構造類型への分類に際して－」『国際学研究』(10) 1号 pp.109-119
- 木戸光子 (1992) 「文の機能に基づく新聞投書の文章構造」『表現研究』(55) pp.9-19 表現学会
- 時枝誠記 (1960) 『文章研究序説』明治書院
- 佐久間まゆみ (1999) 「現代日本語の文章構造類型」『日本女子大学紀要文学部』(48) pp.1-27
- 佐々木泰子 (2001) 「課題に基づく意見の述べ方－日本人大学生の場合・日本語学習者の場合－」『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』平成11・12年度科学研究費補助金研究基盤研究 (B) (2) 研究成果報告書 (研究代表者 宇佐美洋) pp.219-230
- 杉田くに子 (1994) 「日本語母語話者と日本語学習者の文章構造の特徴－文配列課題に現れた話題の展開－」『日本語教育』(84) pp.14-26
- 田代ひとみ (1995) 「中上級日本語学習者の文章表現の問題点－不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる－」『日本語教育』(85) pp.25-37
- 永野賢 (1986) 『文章論総説』朝倉書店
- 益岡隆志・田窪行則共著 (1992) 『基礎日本語文法』改訂版くろしお出版
- Kaplan, R. B. (1966) "Cultural thought Patterns in Intercultural Education" *Language Learning*, vol.16, pp.1-20